

宮城県登米市石越町方言のアクセント

—「南奥特殊アクセント」の分析—

佐藤 奏

1. はじめに

1.1. 本稿でとりあげる方言について

岩手県のおおむね平泉町以南、および宮城県の仙台市より北の地域のアクセントは、平山輝男(1954)で「特殊音調II」(p. 449ff.)、田中宣廣(2005)では「南奥特殊アクセント」(p. 246)と分類されている。本稿では後者を用いる。この地域の地図は末尾の地図を参照*1。

この地域の方言アクセントに関しては以下の研究がある。まず本吉町、栗駒町(現栗原市栗駒)、稲井町(現石巻市の一部)のアクセント体系が、所属語彙の出入りはあるものの「下げ核」(用語は上野善道1992に従う)による体系であることが平山(1959)によって示された。大西拓一郎(1989a)には築館町(現栗原市築館)の名詞アクセント語彙の報告がある。ただし築館が「下げ核」であるとは必ずしも言えないとのことである。また大西(1989b)で、志津川町(現南三陸町志津川)も下げ核(であって昇り核ではない)の体系であることが示された。大西(1990)は同町の用言のアクセントの様相を述べている。

岩手県の、この地域より北には「昇り核」アクセント(上野1980・1992)、さらに沿岸部の宮古市や山田町は「昇り核+重起伏調」地帯(大西1989c、田中2005)がある。この地域より南には仙台市から茨城県にかけて無アクセント地域が広がっている。仙台市付近は東北地方太平洋側における多型アクセントと無アクセントの境界となっている。南奥特殊アクセントの中でも、南へいくに従って無アクセント的な音調が現れる(佐藤亮一1963・1966、武田拓1993)。

本稿では、南奥特殊アクセントに属する宮城県登米市石越町*2方言の名詞のアクセントおよび文末の言い切りイントネーションについて考察する。この方言は基本的に大西(1989b)の志津川方言と同じ体系と考えられる。既に大西論文では比較的詳細な観察がなされているので、これを拠り所としつつも、若干異なる記述を提案する。話者は同

*1 合併により市町村名が、各先行研究の発表時とは大きく変わっている。本文中で随時注記する。

*2 /ミヤ]キ'ケン トメ]シ イシコシマ]チ/, 単独では/イシコシ]/。

市同町出身のS・Y氏（1921年生まれ、女性）、および、当地ではないが近隣の出身である筆者の祖母（栗原市瀬峰^{せみね}出身、1929年生まれ）、母（登米市^{はさま}迫町出身、1956年生まれ）。筆者自身の内省も加味する。筆者は石越町出身で18年間生活し、その後東京で5年間暮らしている。出身地の違いによる差は小さいが、祖母については他の3人と所属語彙が一部異なる。

なお、東北方言一般に現れる分節音の特徴がこの方言にも現れるが、本稿では音韻レベル・音声レベルとも東京方言に準ずる表記を用いる（分節音は大部分がそこから規則的に再現できる）。いわゆる鼻濁音/ɸ/はカ^ゝキ^ゝク^ゝケ^ゝコ^ゝで示す。

1.2. 記号とアクセント核

記号について。音調の上げを [, 下げを] , 小幅な下げ（詳細は第3節でとりあげる）を ' , 音節内の下降を]] で表す。

この方言は後で見るように「次の拍を下げるアクセント核」を設定して記述することができる。この特徴＝「下げ核」を/]/で表す。/○○]○/とあれば第2音節が核を担っている。なお、ひとまず通説に従い、東北方言にはモーラを認めない立場をとることにする。

2. 名詞のアクセント

2.1. 音調の実相

名詞を単独で、言い切りの形で発音したときの音調を以下に示す。sは軽音節、Sは重音節（/イ、ン、一、ッ/を伴った音節）を表す。

(1)

軽音節だけからなる語

S	SS	SSS	SSSS
ヒ]]. (日)	ミ'ズ。 (水)	サカ'ナ。 (魚)	トモダ'チ。 (友達)
～ヒ。	～ミズ。	～サカナ。	～トモダチ。
[ヒ]]. (火)	[ハ]ル。 (春)	—	—
	ヤ[マ]]. (山)	ワ[サ]ビ。 (山葵)	ム[ラ]サキ。 (紫)
		アタ[マ]]. (頭)	カミ[サ]マ。 (神様)
			アミモ[ノ]]. (編み物)

重音節を含む語

S	Ss	sS	
カン。(勘)〜カン。 [カン]。(缶)	カン'ジ。(漢字)〜カンジ。 [タン]ポ。(田んぼ) ズン[ダ]]。	ウ'ドン。〜ウド'ン。〜ウドン。*3 — —	シャ[シン]。(写真)
SS	Sss	sSs	ssS
カン'タン。(簡単) 〜〜カンタン。 [シン]ブン。(新聞)	エント'ツ。(煙突) 〜エントツ。 [ブン]ドキ。(分度器)	チャダン'ス。(茶筥筍) 〜チャダンス。 —	アク'ニン。(悪人) 〜〜アクニン。 —
カン[テ]ン。(寒天)	(ウン[ザ]リ。) カンス[キ]]。(門)	ブ[ラン]コ。 シャシン[ヤ]]。(写真屋)	エ[ブ]ロン。 ブツ[ダン]。(仏壇)

1音節語は言い切りでも/○=/と/○]/を発音し分ける(東京方言の1モーラ語では、/エ=/^(柄)と/エ]/^(絵)の言い切りがともに[エ。となる)。また、ム[ラ]サキ に対して例えば [コイ]ムラ]サキ(濃い紫)となり、下がり目の方が残るので、当方言は「下げ核」を持つものとして記述できる。

2.2. 語頭核制限

上記「—」は体系のアキマであり、記述方法が問題となる。これは規則的で、ごく大まかにいえば、

3音節以上では、語頭の軽音節は核を担えない

ということである。この「語頭の軽音節が核を担えない」制限を「語頭核制限」と呼ぶことにする。

2.2.1. 志津川方言の分析(大西1989b)からの考察

大西(1989b)の志津川方言でも全く同じアキマがあり、この地域のアクセントの共通特徴といえる。大西は志津川方言の名詞のアクセントを以下のように記述している。

- (2) / ○ = ○○ = ○○○ = ○○○○ = …
 ○] ○]○ 重]○○ 重]○○○ …
 ○○] ○○]○ ○○]○○ …
 ○○○] ○○○]○ …
 ○○○○] … / (p. 76 ; 用語と記号は統一、重 = 重音節)

*3 重音節が末尾の場合このように揺れるが、以下これを略してウ'ドン。〜〜ウドン。のように書く。

これに石越方言の語をあてはめれば次のようになる。

／ヒ＝ミズ＝サカナ＝トモダチ＝ …
ヒ]ハル ブン]ドキ シュウ]ベルト …
ヤマ]ワサ]ビ ムラ]サキ …
アタマ] カミサ]マ …
アミノノ] … / (は重音節に限る)

これは一見問題がないようであるが、/s]S/というアキマが反映されていない。2音節語の語頭核に何の制限もない(/O]O/) ことになってしまっている。実は大西論文では/s]S/がアキマであること自体は述べられているが、体系として上の形にするときに抜け落ちたものと見られる。

また、母音無声化音（以下単に「無声化音」という）の扱いにも問題がある。大西論文には

- (3) 2モーラ目が無声母音の [ポ]スト, [マ]スク, [レ]ストラ_N 等は例外に見えるが、いずれも/pos]-to, mas]-ku, res]-to-ra_N/のように第1, 第2モーラをCVCの閉音節と解釈すれば例外ではなくなる。 (p. 70注6)

とあり、石越方言でも次のような例がある（「△」は無声化の印）。

- (4) [ハク△]シュ(拍手), [ドク△]シヨ(読書)
[テス△]ト, [マス△]ク
[カフ△]カ(外国人名)

これについてであるが、まず、少なくとも石越では無声化音の部分まで「高い」構えをとる（[マ]ス△クではなく[マス△]ク）。この位置以外に出る無声化音も同様である。しかしながら本稿では、音韻レベルでは/マ]スク/と見る*4。つまり語頭に核が存すると考える。

ス△だけでなく無声化音一般について同様の現象が見られる（おそらく志津川でも同様。ただし、ク△・ス△以外で該当する語彙は少ない）。これは語頭が（音声レベルで）事実上の重音節であるために語頭核が許される、と見てよく、かつそれにとどめるべきであろう。上記のように音韻レベルに踏み込んで閉音節と解釈すると、

この位置以外に現れた無声化音も同様に解釈する必要がある；

*4 音調の実現に際して下がり目が移動する(/マ]スク/ → [マス△]ク)。一方/マス]ク/と解釈し、上がり目(∩)すなわち句音調(後述)の方に移動規則(マ[マス]ク → [マス△]ク)を設ける方法もあるにはあるが、そうするだけの必然性は薄いように思われる。

語頭に立つ場合に至っては草/ksa/, スケート/skeRto/のようにCCV音節を認めざるを得ない

ということになり、コストが大きいからである。

まとめると、

- (5) n音節語 ($n \geq 3$) の/軽]無○(…)/は、n-1音節語の/重]○(…)/の型に支えられて存立する (軽=軽音節, 無=無声化音節)

ということになる。

2.2.2. 体系の記述

2音節語の問題に戻ろう。語頭核では/s]s, S]s, S]S/があつて/s]S/が無い。これは3音節以上で/重]○○/とするような単純な記述ができない (/重]○/とすれば/s]s/が、/○]軽/とすれば/S]S/がそれぞれ含まれなくなる)。そこで、

- (6) /重]○/ + /軽]軽/

という形で記述することにする。つまり、2音節でも語頭核制限を認め、かつ例外として/軽]軽/が存在するという枠組である。その理由は2点ある。

第1点は上に述べた無声化音との関係である。3音節の/軽]無○/が2音節の/重]○/に支えられていることは、それより多い音節数の場合と同じであつて、その共通性をもって/重]○/を立てる。

第2点は通時的な事情がからむ。そもそもなぜ語頭核制限は「3音節以上」についての規則なのだろうか。実は、/軽]軽/は最近現れた新しい形である可能性がある。平山(1954)には次のような記述がある。

- (7) 東京式音調地帯 [=岩手中部以北・青森・秋田を中心とする地域] の多くで頭高型の、

息・臼・海・帯・数・絹・箸・針・松・麦、鯉・猿・鶴、兄・足袋・粒・茄子・葱・毯…… (主として第四・五類のうち、第二音節が狭母音i・uとなる語を含む) などの語類が、この方言 [=「特殊音調II」=平泉～仙台] では反対に、

((エ[ギ・エ[ギ]カ, ウ[ス・ウ[ミ・オン[ビ・カン[ズ・キ[ヌ, コ[エ・サ[ル・ツ[ル……))となり、[…。これは松島町^{まつしま}・鳴子町^{なるこ}・登米町^{とよま}・気仙沼町^{*5}

*5 後三者はそれぞれ現大崎市鳴子温泉、登米(とめ)市登米(とよま)町、気仙沼市。

などはもとより、岩手県南部地方（東磐井郡・西磐井郡*6 などを中心とする）及び同県南部寄りの海岸地方（気仙郡*7 などを中心とする）などにいたって、さらに徹底している。（p. 484；記号は統一、〔 〕・ルビ・注は引用者）

筆者のアクセントでは、ここに挙げられた中で「海・猿・鶴・毬」は/○]○/*8、「鯉」も/○]/である。

また本堂寛(1982)によれば、一関市山目^{やまのめ}では、石越で/○]○/である「春・秋・猿」が○[○の型に所属している。「貝」のみが「貝 ●○▷」と頭高型に入れているが、これは1音節で/○]/に属する。よってここには/軽]軽/の型が無い可能性がある。

以上2点から見て(6)のような記述を採ることにした。無声化音節のことも加味すると、結論としては以下のような体系となる（音韻表記だが便宜上「Δ」もこの中で示す）。

(8)	/ ヒ=	ミズ=	サカナ=	トモダチ=	…
	ヒ]	{ <u>タン</u>]ボ	{ <u>ブン</u>]ドキ	<u>シュー</u>]ベルト	…
		{ハ]ル}例外1	{ボ]スΔト	レ]スΔトラン}例外2	…
		ヤマ]	ワサ]ビ	ムラ]サキ	…
			アタマ]	カミ]サマ	…
				アミ]モノ]	… /

_____は重音節に限る。

【語頭核制限】

原則：2音節以上では、語頭の軽音節は核を担えない。

例外1：2音節語は/軽]軽/が存在する。

例外2：語頭が軽音節であっても、続く第2音節が無声化母音を持つ場合は事実上の重音節となり、/軽]無○(…)/の形で語頭核が許容される。

なお「句音調」（上野2003ほか）は、「核のある音節で上がり、その後は句末まで核に従って下がる。無核の場合は低平調」ということになる。

2.3. 「弱」の概念とモーラ単位の記述の可能性

ところで、東北方言はモーラではなく音節単位の方言であると一般に言われ、本稿もそれに従っている。しかし、モーラの定義が問題である。日本語のモーラは一般的には

*6 この2郡は大部分が現一関市へ編入。

*7 当時の気仙郡の大部分は現大船渡市・陸前高田市・釜石市にあたる。

*8 「海」については、祖母は少し悩んで/○○]/とのこと。母は/○]○/である。なお登米市や栗原市は海岸部への交通手段に乏しいこともあり「海」はあまり日常的な単語ではない。

「等時性」を要求するが、上野(2001)で「日本語・ラテン語・英語に共通するモーラの定義」:

(9) 軽音節と重音節の音韻的区別があれば、その言語は「モーラ」をもつ

が出された。このレベルでモーラを定義するとすれば、東北方言も「非等時的モーラ」を持つ⁹。ここで、石越方言をこの意味でのモーラを用いて記述することを考えよう。核の位置の制限をめぐって、上野(2003)は「弱」という概念を定義している。

(10) 「弱」: 音声学的に見た相対的に弱い単位。「弱」にアクセント(核)がくることになる場合は移動が生ずる。(p. 80)

(11) 「弱」の諸タイプ

標準語: 特殊モーラ [=モーラ音素]

岩手方言: 特殊モーラと(○)狭(広)音節

ラテン語: 軽音節(□○□) [ただし、一型アクセント]

伊豆方言: 促音のみ

(p. 80; [] は原文)

これを踏まえて石越方言の体系を記述すると、以下のようになるうか。

(12) / ○ = ○○ = ○○○ = ○○○○ = ...
○] ○]○ ○]○○ ○]○○○ ...
○○] ○○]○ ○○]○○ ...
○○○] ○○○]○ ...
○○○○] ... /

石越方言の「弱」:

弱A {モーラ音素・無声化モーラ} および,

弱B {3モーラ以上の語で第2モーラが弱Aでない場合の第1モーラ}

石越方言では無声化モーラ(音節)は核を担わないとみられる¹⁰ので、無声化モーラは「弱」に加わる。そして、モーラ音素と無声化モーラを合わせて「弱A」とし、さらにそれを用いて語頭核制限=「弱B」が表せる。表の第2行は結果的に次のように書ける。

/ ○] ○]○ ○]A○ ○]A○○ ... / (A=弱A)

⁹ 早田輝洋(1999)も参照。「日本語には、東北諸方言も鹿児島方言も含めて、すべてその区別が有ると考えられる」、「長音節を2と数え、短音節を1と数える単位をモーラという」(p. 7)。

¹⁰ 核を担うような語例はまだ見つからない。なお、東京方言は無声化モーラも核を担う。熱かった/ア]ツ△カッタ/: 厚かった/アツ△カッタ/, 微か/カ]ス△カ/: 貸すか/カス△カ/。(川上肇1969)

つまり、弱Aが核を担わないことが、語頭核制限と密接に関わっている（可能性がある）、ということである。特に、「無声化音一般が核を担わない」ことを語頭核制限と関連づけられる点で(8)よりも優れている。

もっとも、その関連を裏付ける他の証拠はまだ見つからないし、ほかに問題点として以下の2点が挙げられる。

まず、弱Aと弱Bは多少性質が異なる。「弱」は基本的に、いかなる環境においても核がこないはずだが、弱Bは（当然といえば当然であるが）助詞付きや、ある種の複合語ではあてはまらない。「春まで/ハ]ルマデ/、酢の物/ス]ノモノ/などが存在する*11。弱Aではこのような環境でも核がこない。

また、「弱」に核がくる場合の「移動」については、規則として記述できるかどうか現段階では分からない。少なくとも無声化音に関しては、前への移動も後ろへの移動もある。3モーラ（音節）の外来語は一般に/○○]○/（/クラ]プ/など）となるが、「ポスト」は/ポ]ス△ト/と1モーラ（音節）前に移動している。一方、「○○子」という人名は一般に/○○]○/（/タカ]コ/など）だが、サチコは/サチ△コ/と1モーラ（音節）後ろに移動する*12。

そもそも、「弱」にこのような2段階の記述がありうるのか、あるとすればそれは何を意味するのか、などの問題もあり、今後の課題とせねばならない。それらが解決できていないため今回この記述を採ることはしない*13。

3. 言い切り下降イントネーション

先に保留しておいた、無核語の言い切りに見られる小幅の下がり'について述べる。観察は大西(1989b)が詳しいので、以下に引用する（(14)はすべて無核語についての観察である）。なお「標識」は核を、「有標」・「無標」は有核・無核を表す。

(14) 毛。ケ] 水。ミズ 釣瓶。ツルべ 腰掛。コスカゲ

[中略]

毛も。ケ'モ 水も。ミズ'モ 釣瓶も。ツルべ'モ 腰掛も。コスカゲ'モ

[...] 下がりの位置が2モーラ以上の語で1モーラ分後ろにずれていることがわかる。

*11 本稿作成後、口頭発表で上野善道先生からご指摘を賜り、/ウ]ルコメ/(うるち米の意)が見つかった。これ自体はやはり一種の複合語（「酢の物」などと同じく）と見ることもできると思われるが、調査語彙をさらに広げると、あるいは語頭核制限そのものを撤回する必要が出てくるかもしれない。

*12 新しい世代では/サ]チ△コ/となる。

*13 なお大西は志津川方言にモーラ性を認めるが、それはまた別の観点からの議論であり、今回は取り上げない。

次に助詞「も」がついて文頭に置かれたとき、つまり後に述部がついた場合、
[…] 次のようになる。

毛も… ケモ… 水も… ミズモ… 釣瓶も… ツルベモ…

腰掛も… コスカゲモ…

このように […] 下がりは消える。

[中略]

さらにこの下がりには […] 言い切り発話にあっても消えることがある。すなわち、

毛。ケ]]~ケ 水。ミ'ズ~ミズ 釣瓶。ツル'ベ~ツルベ

腰掛。コスカ'ゲ~コスカゲ 毛も。ケ'モ~ケモ 水も。ミズ'モ~ミズモ

釣瓶も。ツルベ'モ~ツルベモ 腰掛も。コスカゲ'モ~コスカゲモ

[…] 下がりの有無は音韻的には無意味であることがわかる。

(p. 80 ; 記号は統一)

- (15) 当該方言の標識の下げ幅は、東京方言の核の下げ幅を5とすれば、それよりも狭くて概ね4~3ぐらいであって、しかも無標の下げ幅はさらに狭く2~1ぐらいであり、かつ音節数の多い語ほど無標の下げ幅は狭くなるように聴かれる。

(p. 71)

この下降について、直感として筆者には以下のように感じられる。

少なくとも、名詞とその助詞付きの言い切り一般で現れる；

下降が有った方がより「方言的」な発話と感じられる；

語末音節（あるいはモーラ）が下がる、といったものではなく、もっと漠然と

「末尾がやや下がる」という程度である。

実は、無核以外の語でも主観的にはワ[サ]ビ↓。のように、末尾を下げようとする力（自然下降とは別）が働いているように感じるのである。本稿ではこれを「言い切り下降イントネーション」と位置付け、

言い切り形にはすべてこのイントネーションが被さっている

と考える。語末核の アタ[マ]]。の音節内下降も、「言い切り下降イントネーション」をも含んだ下降である、と解釈する*14。これを今までの'（および1音節無核語で現れる]]）に代えて、言い切り末尾に記号"を置いて表すことにする。具体的には次のようにする。

ヒ]]。→ヒ"。 サカ'ナ。→サカナ"。 ワ[サ]ビ。→ワ[サ]ビ"。

*14 この音節内下降の原因を「言い切り下降イントネーション」だけに求める、とまでは解釈しない。語末核では他と違って下降が大きくはっきりしているためである。

アタ[マ]。→アタ[マ]]”。

石越方言から助詞付きの例を出そう。

- (16) (「どこに行くんですか」と問われて)
エキサ”。／ハ[タ]ケサ”。／ヤク[バ]サ”。(駅/エキ=/に。／畑/ハタ]ケ/に。
／役場/ヤクバ]/に。)

このほか、例えば次のような発見・驚嘆の一語文にも見られる。

- (17) (綺麗だこと,) サクラ”。／ソ[ラ]]”。(桜/サクラ=/。／空/ソラ]/。)

他にどのようなときにこの下降調が現れるかや、用言の陳述イントネーション(上野1980)・疑問の下降イントネーション(この方言は下降で疑問を表すことがある)との関係についてはなお調べなければならない。

4. まとめ

以上、南奥特殊アクセント地帯に属する宮城県登米市石越町方言のアクセントと切りイントネーションについて考察した。研究がそれほど多くなく、付属語や複合語アクセントの研究は管見に入らない。これについては今後の課題としたい。

【参考文献】

- 上野善道(1980)「アクセントの構造」, 柴田武(編)『講座言語1 言語の構造』:85-134, 大修館書店
上野善道(1992)「昇り核について」, 『音声学会会報』199:1-13
上野善道(2001)「日本語のモーラ, ラテン語のモーラ, 英語のモーラ」『国語研究』國學院大学国語研究会創立50周年記念号64:8-16
上野善道(2003)「アクセントの体系と仕組み」, 上野善道(編)『朝倉日本語講座3 音声・音韻』:61-84, 朝倉書店
大西拓一郎(1989a)「宮城県北部方言の名詞のアクセント語彙」, 『日本文化研究所研究報告』別巻26:166-147
大西拓一郎(1989b)「宮城県志津川町方言の名詞のアクセント——音節単位によるモーラ方言の分析——」, 『国語学』158:81-68
大西拓一郎(1989c)「岩手県山田町方言のアクセント」, 『国語学研究』29:84-75
大西拓一郎(1990)「宮城県志津川町方言の用言のアクセント」, 『日本文化研究所研究報告』別巻27:82-57
川上肇(1969)「無声拍の強さとアクセント核」, 『国語研究』27:41-54 (川上肇『日本語アクセント論集』(汲古書院, 1995>2005):316-331に収録)
佐藤亮一(1963)「宮城県における多型アクセントの南限——主として二音節名詞について——」, 『文

芸研究』45:40-47

佐藤亮一(1966)「宮城県北部における三音節名詞のアクセント」、『国語学研究』6:16-29

武田拓(1993)「宮城県における品詞・拍数別にみた有型・無型アクセント境界について」、『国語学研究』32:90-79

田中宣廣(2005)『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』, おうふう

早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』, 大修館書店

平山輝男(1954)『日本語音調の研究』, 明治書院

平山輝男(1959)「仙北方言のアクセント体系とその性格」、『音声学会会報』100:27-30

本堂寛(1982)「岩手県の方言」、『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』:237-269, 国書刊行会

(追記)

本稿は2008年2月に行われた「東京大学・高麗大学共催 日本語学・日本文学・中国文学 国際シンポジウム」での口頭発表をもとにしている。

地図の作成にはフリーソフト「白地図KenMap Ver8.3」を利用した。

(<http://www5b.biglobe.ne.jp/~t-kamada/>)

(さとう そう 大学院人文社会系研究科 修士課程1年)

【地図】

国土地理院承認平14総複第149号

